

# 性的被害サバイバーのライフステージと回復に関する研究

後山明美

## 序章

### 1. 研究背景

平成27年版犯罪白書によると、2014年度の強姦件数は1,250件、強制わいせつ件数は7,400件であった。しかし、被害様態別過去5年間の被害申告率で捜査機関に被害を届け出た者はわずか18.3%で、約7割は届け出をしていない。つまり、性的被害を受けた約7割の者がその被害を社会に認知されずにいる。また、厚生労働省による児童相談所での児童虐待相談対応件数（平成27年度）103,260件（速報値）のうち性的虐待は1.5%であった。性的被害はより密室な環境の中で行なわれ、当事者が自身の身に起きた事実を語るといふ壁は大きく、また発見されにくい。この現状により、被害を捜査機関に届け出なかった者、性的被害の事実を認知されなかった者、自分の中で事実の語りを黙秘してしまった者が出てきてしまう。その結果、被害者に対する支援は確立されずらく、どのようなニーズがあるのかも把握しづらい状況が生まれてしまう。このような状況下では、支援する側も支援の方法を確立するのが困難だと言える。また当事者が被害事実を開示できたとしても十分な支援体制が整っていないために回復に向かえないという危険性が生じるのではないかと考えた。このことから、性的被害を受けた者の人生径路を辿り、被害や様々な出会いや人生の出来事を通してどのような結果に繋がっていったのかを丁寧に追っていくことが重要になると考えた。

### 2. 研究目的

被害について開示したとしても“本当に必要な支援”は当事者によって異なる。従って、様々な傷を抱える当事者に対応できる精神的・そして身体的・社会的な支援ができる体制を整える必要があると考えた。本研究では性的被害を受けた方々のライフステージとその回復のプロセスを追い、どのような経験が当事者のアイデンティティーに影響を及ぼしたのかを明らかにした。そして、あるライフステージにおいてどのような機会があればその後の生活をする上での深刻化を防げたのかを探った。また、回復のプロセスを辿るために必要となるきっかけは何かを考察し、今後求められる支援について検討を行った。

### 3. 研究方法

#### 1) 性的被害の課題の整理

性的被害を受けた者はどのような課題をもっているのか。また、性的被害の現状、性的被害の捉え方の課題、性的虐待の定義についての問題点、加害者は大人だけではないという認識をもつことの重要性について整理した。

#### 2) 性的被害サバイバーに対して行われている支援の現状の把握

実際に性的被害を受けた者に対し行われている治療プログラムの内容、また性的被害サバイバーが被害のことを開示した際にどのような配慮がされているのかについて把握し、現在不足していると思われる支援について検討した。

### 3) キーワードの抽出

35人の性的被害を受けた者（ある背景をきっかけに性的被害を受けやすい環境下に立たされてしまった者も含む）の書いた手記・インタビュー記録等、経験した事実に基づく内容から、ライフステージにおける被害や様々な出会いや人生の出来事を通し、どのような影響を受けたのか（例えばアイデンティティーの確立においてその体験はどのように影響したのか）等を時系列に整理し、回復へと近づいていったプロセスを分析した。

### 4) 性的被害を受けた者の辿った径路を図示し、個人々の経験、および機会や出会いを一連の流れとしてまとめ、比較、分析した。

## 4. 用語操作上の定義

1) 本研究では、性的被害者を“過酷な環境を生き抜いてきた人”又は“生存者”という意味で「性的被害サバイバー」という用語で扱うこととする。

2) 本研究では用語操作上の観点から、「径路」という用語を「人生のプロセスを辿ってきた過程」と定義する。

## 第1章 先行研究の検討

### 1. 性的被害の現状と課題

ここでは、字数の関係から詳細は割愛させていただき、課題点を端的に述べる。

#### 1) 性的被害の現状

強姦罪、強制わいせつ罪、性的虐待の定義の整理を行った。

#### 2) 性的被害の捉え方の課題

少年や男性も性被害にあうことについてほとんど知られていない現状があることや、“男性が被害者になるとは考えづらい”という認識の課題、男性であるが故に生じる問題について示し、男性性的被害サバイバーの生きづらさについて触れている。このような背景から、性的被害サバイバーは女性だけに限定するのではなく、男性も含めたものであると認

識をもつ必要があると考えた。

### 3) 性的虐待の定義についての問題点

ここでは、保護者以外の大人・または同年代の子ども等から加害を受ける性的被害サバイバーも存在するため、加害者を「親または親にかわる保護者」と限定することは危険ではないかと示した。

### 4) 加害者は大人だけではないという認識をもつことの重要性

権力や権威の誤用、濫用をするのは大人だけだろうか。私が調査対象とした性的被害サバイバーの中には大人からの被害を受けた者だけではなく、同年代の子どもから被害を受けた者もいた。つまり、性的被害を理解するとき、その加害者となりうる者は子どもの可能性もあることを視野に入れておく必要があると考えた。「性的被害」という言葉だけを耳にすると「大人の加害者」と連想してしまいがちだが、子どもの加害者もいることを社会的に認知することは重要で、社会は性的被害・性的虐待の加害者についての見識をより広めていく必要がある。

## 2. 性的被害サバイバーに対して行われている支援の現状

### 1) 治療プロセス

被害児への援助として、必要に応じて性器や肛門周辺部等の外傷や性行為感染症、妊娠などに対する身体面の検査と治療を行っていることや、カウンセリングや遊戯療法、絵画療法、集団遊戯療法を中心とした心理面の治療をされていることが把握できた。また、サバイバーへの援助として自助グループ等で長い間孤立し孤独に耐えてきた者が苦しみや悲しみを互いに分かち合う場を守るという実践も行われている。そして、性的被害を受けた者だけに限らず、家族への援助、加害者への援助も実施されていることを把握することができた。

### 2) 開示を聞くとときの配慮

特定非営利活動法人全国女性シェルターネット（2009）は子どもの性的被害サバイバーに対して聞き取りをする際の7つの注意点を述べている。また森田（1991）は、日本語には性器を日常会話で語る用語すらないことを指摘していた。子ども時代に活用できる言語の数が乏しかったために沈黙を貫き、大人になって初めて開示できるようになる事例もあることが分かった。このことから子ども時代に被害を開示する難しさの背景を理解しておく必要があると考えた。

### 3) 現在不足していると思われる支援

性的被害サバイバーに対し必要に応じて身体面での検査をしていることや、カウンセリングを始め心理面の治療を行っていること、自助グループの参加を推奨していることが把握できた。また、開示を聴く際の注意点や知っておくべき背景についても理解できたが、ここで問題となるのは、そのような資源にどれだけの性的被害サバイバーが繋がれているのか、ということである。被害が第三者により発見され、治療プログラム等に繋がられる者は良いが、性的被害の事実を外に打ち明けることなく過ごしている性的被害サバイバーは治療には繋がっていないのではないかと考えた。また、治療に繋がりがうなきっかけがあったとしても「恥」や「罪悪感」を抱えている者は自分から治療を受けようと決断するのは難しいのではないだろうか。つまり、支援を受けるのは本人任せであることを否めないのではないだろうか。また、治療も個別化しているため実際に行われている治療内容の情報をすることも困難で、支援する側にとっても支援に関わりにくい状況があるのではと考えた。

そして、「性」に関することはとても取り扱いが難しいため、事実を聴くときは「同性」であったり、「性的被害サバイバーが話しやすい性別の者」の対応が求められると考えられるが、実際にそのことについての議論は活発になっていないようにも感じられる。

つまり、性的被害サバイバーのニーズが実際には把握できていない現状があるのではないかとすることである。そのため本研究では、性的被害サバイバー一人ひとりが求めている“ニーズ”は何だったのかを明らかにすることを目的とし、質的調査を行った。“ニーズ”は多様性がある。しかし、その一人ひとりの声にならないニーズをキャッチすることは、“その人が本当に求める支援”を知る手がかりになるという考え方に基づく。そして、多様なニーズをキャッチすることが、性的被害サバイバーに対しての理解を深める一つのきっかけになると考えるからである。

## 第2章 性的被害サバイバーのアイデンティティー形成プロセスについての分析

### 1. 分析の目的

性的被害サバイバー本人が性的被害をどのように受け止め、それがどのように心身に影響を及ぼしているのか、また同時に、社会活動にどれだけ影響を及ぼしているのか分析を行った。その後、回復のプロセスを辿るために必要なきっかけとなるものを明らかにし、今後求められる支援について考察した。さらに、性的被害サバイバーの支援を行うための必要条件、支援のポイントについても考察した。

### 2. 分析の方法

#### 1) キーワードの抽出

35人の性的被害サバイバー（ある背景をきっかけに性的被害を受けやすい環境下に立たされてしまった者も含む）の書いた手記・インタビュー記録等、経験した事実に基づく内容から、性的被害サバイバーが辿ったプロセスにおいて被害や様々な出会いや人生の出来事によって、どのような影響を受けたのか等を時系列に整理した。その後、35人の性的被害サバイバー（ある背景をきっかけに性的被害を受けやすい環境下に立たされてしまった者も含む）の経験した事柄をキーワー

ドとして抽出し、類似するキーワードを帰納的に分類した。

#### 2) 35人分のプロセスの整理

35人の性的被害サバイバーのライフステージにはどのような類似した人生径路がみられたのか、またその時期によってどのような機会が存在したのかを整理した。その後、35人の性的被害サバイバーの人生径路を一人ずつ図にし、どのような径路を辿ってどのような結果に繋がったのかの流れを捉えられるようにした。そして、35人分の径路を一つにまとめ、どの機会を通るとどの結果に繋がりがやすいのかを見つけ出すことができた。

#### 3) 回復に繋がる機会や出会いの析出

多くの事例で回復に繋がっている機会や出会いを析出した。

### 3. 分析結果

ここでは、字数の関係から表は割愛させていただき、分析手順を述べる。

#### ①プロセスを時系列に整理

時期・本人の出来事・ページ・事件の理解・アイデンティティーの5つの軸に整理を行った。

#### ②プロセスの説明

時系列に整理したものを文章で説明した。

#### ③段階ごとの整理

どのキーワードがどの段階に当てはまるのかを帰納的に分類し、それぞれに名前をつけた。

#### ④小項目の設定

抽出したキーワードをA～Fに当てはめ、できごとごとに「小項目」として、番号をふつた。

#### ⑤小項目の整理

「小項目」の何がそれぞれの事例の中にあつたかを見る表の作成を行った。

#### ⑥事例を構成する要素の整理

「小項目」を、さらに意味が近いもの同士に帰納的に分類し、それぞれに名前をつけた。

それを「大項目」と呼ぶ。

#### ⑦大項目と小項目の対応

「小項目」が大項目の何に当てはまるのかを示した表の作成を行った。

#### ⑧大項目の整理

「大項目」の何がそれぞれの事例の中にあつたかを見る表の作成を行った。

#### ⑨プロセスの整理

それぞれの事例の人生径路の整理を行った。

### 4. 小括

ここでは35人分のプロセスの整理を行った。35人の性的被害サバイバーのライフステージにはどのような類似した人生径路がみられたのか、またその時期によってどのような機会が存在したのかを発見することができた。

35人分の人生径路の一つにまとめ、どの機会とどの結果が繋がりを深くもっているのかを図で示し整理した。(図1)

※それぞれの繋がりが何事例あつたかで線の太さを変えている。太い線の場合、より事例が多くあつた。

「事例01～事例35の人生径路まとめ」(図1)から発見した知見は以下の通りである。

①「課題のある環境」は「性的虐待・性的被害」に繋がりがやすかつた。

②「内面要因」があることも「性的虐待・性的被害」に繋がりがやすかつた。

③「性的虐待・性的被害」と並行して「身体的虐待を受ける」「心理的虐待を受ける」「ネグレクト被害」も受けている可能性が強かつた。

④「性的虐待・性的被害」を受けた後、特に強く見られる状況・非行・倒錯・逸脱は「自己肯定感の低下」「気持ちの不安定」「混乱」「症状の出現」「ワーカビリティの低下」「自分より力があると感じる人物に従う」「行き場を失った状況」であると分かつた。そして、「感情抑圧」「何らかの逸脱行動」という状態に陥る可能性も高かつた。

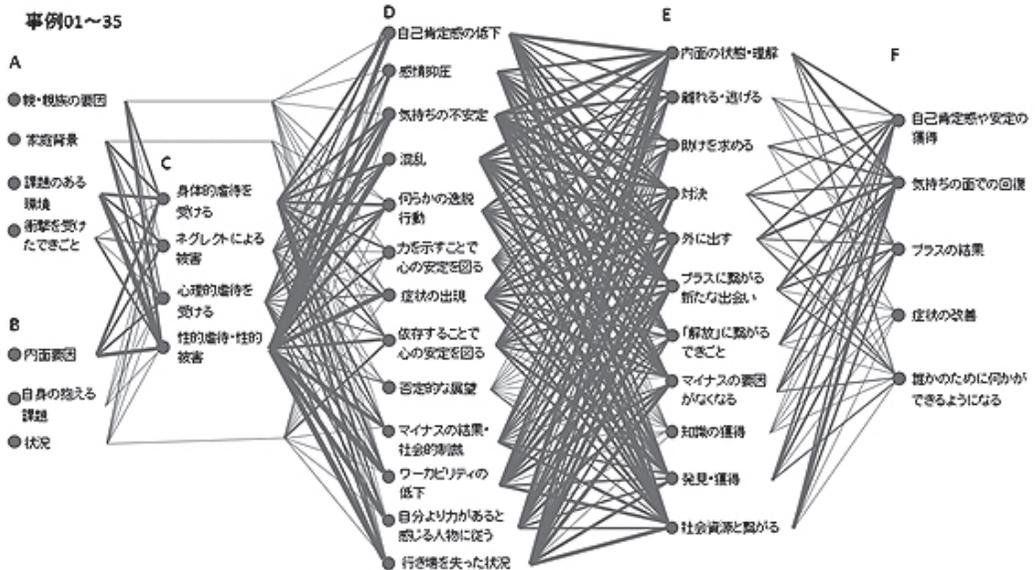


図1. 事例01～事例35の人生径路まとめ

⑤ 【D】の段階である状況・非行・倒錯・逸脱の大項目ごとに見ていくと、「身体的虐待を受ける」「心理的虐待を受ける」「ネグレクト被害」の3つの被害よりも「性的虐待・性的被害」を受けた方がより強くでる状況・非行・倒錯・逸脱としては「自己肯定感の低下」「感情抑圧」「気持ちの不安定」「混乱」「症状の出現」「依存することで心の安定を図る」「否定的な展望」「マイナスの結果・社会的制裁」「ワーカビリティの低下」「自分より力があると感じる人物に従う」「行き場を失った状況」が発見できた。これは、【D】の段階の中の大項目13個中12個が他の虐待を受けたときよりも状態としては陥りやすいという結果が見える繋がりであった。

⑥ (図1)を見ても分かるように、CからD、DからEの線が太く、そして多くあることが分かる。このことから、CからDの間の支援、DからEの間の支援体制が薄いことが予想できた。

※ここで示しているC・D・Eとは事例を構成する要素のことである。

Cは被害内容の大項目、Dはその結果生じた葛藤や倒錯・逸脱・状況についての大項目、

Eは回復のきっかけの大項目のことである。

⑦ Eの「回復のきっかけ」とFの「回復・回復の兆候」で、特に関係性の繋がりが強く見られたのは下記の通りである。

- 1) Eの「内面の状態・理解」とFの「自己肯定感や安定の獲得」
- 2) Eの「内面の状態・理解」とFの「気持ちの面での回復」
- 3) Eの「助けを求める」とFの「気持ちの面での回復」
- 4) Eの「対決」とFの「気持ちの面での回復」
- 5) Eの「外に出す」とFの「気持ちの面での回復」
- 6) Eの「プラスに繋がる新たな出会い」とFの「気持ちの面での回復」
- 7) Eの「社会資源と繋がる」とFの「気持ちの面での回復」

⑧ Fの「回復・回復の兆候」にある5つの大項目と最も繋がりが深かったEの「回復のきっかけ」は以下の通りである。

- 1) Fの「自己肯定感と安定の獲得」と最も繋がりが深かったEは「内面の状態・理解」「外に出す」「プラスに繋がる新たな出会い」「解放」に繋がるできごと」「発見・獲得」

「社会資源と繋がる」

※ E の 6 つとも、35 事例中 8 事例繋がりが見られた。

2) F の「気持ちの面での回復」と最も繋がりが深かった E は「社会資源と繋がる」

※ 「社会資源と繋がる」の次に繋がりが深かった E は「内面の状態・理解」「プラスに繋がる新たな出会い」

3) F の「プラスの結果」と最も繋がりが深かった E は「社会資源と繋がる」

4) F の「症状の改善」と最も繋がりが深かった E は「社会資源と繋がる」

5) F の「誰かのために何かができるようになる」と最も繋がりが深かった E は「内面の状態・理解」

※ 上記で示している F とは回復の内容についての大きな項目のことである。

### 第 3 章 事例からみた性的被害サバイバーに対する支援のあり方

#### 1. 性的被害サバイバーに対する理解を深めるために心に留めておくべき事柄

ここでは第 2 章の分析結果を踏まえ、重要なポイントだと思う 8 項目について整理と考察を行った。

- 1) 相談意欲低下の本質
- 2) 「外に出す」という体験がもたらす二極化した性質
- 3) 誰にも相談できない苦しさの代替となりえるもの
- 4) 実体験を話しやすい相手、話しにくい相手がいることの実態
- 5) 経験として得られなかった「ぬくもり」や「愛情」を「性接触」をすることで得ようとする心理傾向の実態
- 6) 性的被害サバイバーが自分の感情に気付く重要性
- 7) 性的被害の事実を開示したことを肯定的に捉えられる瞬間
- 8) 性的被害を受けたことで変わりえる“性接

触像”の回復

#### 2. 性的被害サバイバー支援を行うための必要条件

ここでは 3 つの条件を示した。

- ① 無条件に受け止めてほしいという気持ちへの対応
- ② 異変に気付き、継続して寄り添う存在
- ③ 自身のアイデンティティーを回復することができる機会の充実

#### 3. 性的被害サバイバーへの支援のポイント

分析結果から捉えることのできた現状ではまだ満たすことができていない実態に注目し、以下の 3 つの条件を設定した。

- ① 回復のきっかけを複数体験できる機会の保障
- ② 支援者側の意識の変革
- ③ 被害の重さは周りの人が決めるものではないという認識をもつ重要性

#### 4. 本研究の成果と今後の課題

本研究では 35 人の性的被害サバイバーのライフステージを丁寧に追ったことで、回復のきっかけとなる機会や出会いの析出ができた。また、性的被害サバイバーに対する理解を深めるために知っておくべき 8 項目の事柄について、支援を行うための必要条件の提示・性的被害サバイバーへの支援のポイントを明らかにすることができた。だが、性的被害サバイバーが実体験の開示をできてこそ取り組める研究だったため、語られていないことについて把握することには限界があり、本研究では 35 人の性的被害サバイバーが開示してくれた断片的なものでしか分析ができなかった。そのため、今後は本研究では明らかにできなかった「今まで語ることのできなかった実体験」から把握することができる回復へ繋がる可能性の高い機会や出会い、支援のポイントを本研究の分析結果を検証しつつ、さらに創出していくことが今後の課題であると考えられる。